エンディット・ファンタジア

十三月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エンディット・ファンタジア

【Ｎコード】
Ｎ３６４２Ｙ

【作者名】
十三月

【あらすじ】
既にクリアされた世界、【グローム・ウィル】。
ゲームと現実がごちゃ混ぜになった中途半端な世界で、クリア後も元の世界へと帰ることを選ばず、この世界に残る事を選んだ主人公達。
剣と魔法のＲＰＧの世界に残留し、それでもそれなりの日常を送っていた主人公たちだったが、ひょんなことから尋ねた始まりの地でこの世界に決していない筈の者と出会う。

新たな人物と共に、終ってしまっていた筈の物語が、始まる。

00――いつも通りのプロローグ（前書き）

※注意※

・作者の妄想と気紛れの産物です。

・最強物なため、そういう類のものがあまり好きでない方はご遠慮ください。

・設定があやふやだったり、プロットがおかしいことがあります。

・というか、そもそもプロットを殆ど考えずに書かれています。ご都合主義満載です。

・一切の断りなく更新変更される事があります。

・更新は不定期です。

・誤字脱字に関してはコメントで知らせてくれると助かります。

・応援コメントとか送ってくれるとやる気出るかも。

以上の事を承諾してくださる方は、駄文ですが楽しんでいってください。

00――いつも通りのプロローグ

朝。
濃い夜闇が支配していた世界を気の早い太陽が侵食する。
朝日を受けて、静かに澄んでいた世界は急速に騒がしくなり始める。
森に住むモンスター達の鳴き声が響き始め、街に住む人々の歌が微かに聞こえる。

この世界で最も高い山の頂上で、今日もまた朝を迎えた。
「やっぱり、何度見てもいいねぇ……」
普段は旅人達に景色なんてどうでもいいと一蹴する俺だが、ここからの眺めの特に朝日は何度見ても素晴らしい物だと思う。

絶望した時、疲れ果てた時、死にたくなった時。
この朝日を見ると、自分がちっぽけなものに見えて、世界の大きさを感じて。
傷を癒すとまではいかなくても、立ち上がる事力を貰った。

「さて、それじゃ。本日も頑張って生きますか」
今日もまた、朝日に後押しされて立ち上がる。

――――この、【エンディッド・ファンタジア】で生きるために。

・・・・・α・・・・・

出来るだけの勢いをつけて、ツルハシを振り下ろす。
「ハァッ！」
結構な力で振り下ろされたソレは足元の土へとぶつかり、火花のライトエフェクトを散らした。
地面に刺さったツルハシを引き抜くと、若干その先っぽを削りながらもその代償としてこぶし大の茶色い石ころを提供してくれる。
そのまま足元に転がった石ころは、数秒間実体化した後、僅かに残像を残して消えた。
予め指定してあったアイテムポケットへと収まったのだろう。
いちいち解析するのも面倒なので、石ころはそのまま雑多に入れておいたまま再びツルハシを構える。

この世界において、ツルハシを下す速度は関係無い。
ツルハシの切っ先が鉱石を穿つ事で鉱石を掘り起こす訳では無く、ツルハシの持つワーク・スキル【ピック】が作動して鉱石と言うアイテムを生成しているためだ。
よって、別にツルハシを全身全霊をかけて振り下ろす必要はなく、むしろ片手だけで行動しつつ空いた手で鉱石の解析でもしていた方が良いのだろうが、しかし今までの経験から運命の女神様は真面目な奴に微笑んでくれる……と信じている。

「ハァッ！」
もう一度ツルハシを振り下ろし、鉱石の欠片を出現させる。
今度のは銀がかった白色。レア度が茶色に比べて若干高く、茶色は銅等の４ｔｈクラス程度が中心なのに対してこちらは銀等の６ｔｈクラス程度の物が出やすい。
けれどもこれもまたすぐにアイテムポケット行きにして、ツルハシを構えなおす。

こんな作業を朝の４時ごろから繰り返し、もう３００回を越えただろうか。おかげで鉱石用アイテムポケットには比較的レアなはずの白色の鉱石が５０コ以上入っている。茶色に至っては２００オーバーだ。
ウィンドウ上に無機質に表示されている数字であるからこそ持てるものの、常時実体化されていたらリヤカーでも持ってこなければとても全てを運べなかっただろう。
最も、ツルハシの消耗度も目立つようになってきたし、今日はここまでかもしれない。
白鉱石のノルマである５０コは超えたし、これ以上掘っても良いものは出ない可能性が高い。
けれども、半分寝てても繰り返せるほど体にモーションが染み込んでいるからか、それともネトゲ廃人の悲しき習性なのか。未だにここで未練がましくツルハシを振り続けている。
そんな事を思いながらツルハシを引き抜くも、残念ながら今度は茶色だ。

「出ないなぁ。オレンジ」
オレンジ。とは橙鉱石の事で、この辺り一帯で採れるかなりのレア鉱石である。
解析すれば最低でも７ｔｈクラスは保証。運さえよければ金等の８ｔｈクラスのレア物が出る可能性がある。
しかし、それだけ確率は低く今日の様に３００回振っても１回も出ない事も多い。

「ハァッ！」
お願いします女神様ー。もし出たらお祈りの１つや２つぐらいするから出てくれよー、と祈りつつ再びツルハシを振る。

ガキィン！　という音と軽い火花のライトエフェクトが舞って、ツ

ルハシが地面へと刺さる。
そしてそれを引き抜くと――そこから現れたのは、緑色の鉱石だった。

・・・・α・・・・・

この世界の名前は、【グローム・ウィル】と言う。
大分前からこの名前で呼んでいないので、あっているかどうかは怪しいが。
何せ、今やこの世界の住人の殆どがこの世界を【エンディッド・ファンタジア】と呼ぶため、元の名前なんて使い所が無いのである。
その名前にこめられた意味と皮肉は簡単にして明瞭。
エンディッド・ファンタジアの名前の通り、この世界は終わってしまっているのだ。

事は約5年前まで遡る。
当時大人気だったシリーズ、『ウィルシリーズ』もしくは『ウィル・サーガ・シリーズ』という物があった。
先程の『グローム・ウィル』の様に『～～～～・ウィル』という名前であるため、ウィルシリーズと呼ばれている。
意志（ウィル）という名を冠したこのゲームは、濃厚なシナリオと強烈なサブキャラクター達そして感情移入しやすい主人公を売りにしたＲＰＧだった。
どのシリーズ作品でも、主人公自体の性格は薄くなく、むしろサブキャラクターに負けぬほど濃いぐらいである癖に妙に人間臭い所があるのが特徴で、不思議とその物語に入り込んでしまうような錯覚を起こさせるＲＰＧだった。
またＲＰＧでは珍しくジョブフリーの完全スキル制を採用していた

ためプレイヤーの思うような道へと進めたり、独特の世界観が勇者と魔王のファンタジーという王道でありながら面白く、「ハズレが無い」などと言われるほど全作品がそれぞれ完成されていたこと等から、ライト・コア問わず様々なプレイヤーがこのシリーズに熱狂的になった。
一時期はハードの売り上げとウィルシリーズの最新作の売り上げがほぼ同じだったというのだから驚きだ。

まぁ、ウィルシリーズ自体の事はともかく。
俺こと、二之宮時雨（にのみやときあめ）が、このＲＰＧの代表作である大作『ウィル・シリーズ』の最新作を買ったのはただの気紛れだった。
ゲーム屋に寄った日がたまたま最新作の発売日で、さらにはたまたま残り１本しか残ってないとなれば運命とやらを感じてしまって参考書の代金をほんの少し減らして買ってしまったのも仕方ないだろう。無論、ただの言い訳ではあるが。
だが、どうやら運命の方は本物だったらしい。
家に帰って嬉々としてゲームを起動した瞬間、異常な頭痛に襲われ、そして気が付いたらこの世界に立っていた。
この世界に同じくやってきた３０万人のプレイヤーと共に。

俺達がやってきたこの世界は、公式サイトやＣＭで見たウィルシリーズのグローム・ウィルにそっくりな世界観で出来た代物で、ゲームの世界としか表現のできない代物だ。ゲームと世界観が同じなのでは無く、まさしくゲームの世界という表現が正しい。
視界の右上にはＨＰバーとＭＰバーが表示され、特定の手振りをすることで【メニュー】を呼び出せ、物質はアイテム化してアイテムポケットに入れられる。
具体的に表現するのは難しいが、ついこないだアメリカか何処かの企業が開発したヴァーチャルリアルという奴に似ている。もしあれでＭＭＯＲＰＧを作ったらこの世界の様な物になるのだろう。

中途半端にゲームに浸食された、リアルでもゲームでもない世界。
こっちに来る前に読んだ小説でもそんな奴があったが、それに近い、まさしくお伽噺の様な世界だった。

始めは何か悪い夢か、それとも大規模なゲームイベントかと思った。
けれども、どちらもまた外れだった。
本家グローム・ウィルの旅立ちの街、【ルピス】の大広場でただ茫然と立ち尽くしていた３０万人のプレイヤーの目の前で、なんとラスボスである魔王から直々にこのゲームについての説明があったからだ。
魔王は、全身真っ黒の鎧に手入れの悪い短い金髪という姿で、広場の上空に現れ、この世界についての説明をした。

曰く、これは間違いなく現実であり全てのプレイヤーはこの世界にやってきたのだと。
曰く、このゲームにおけるゲームオーバーは現実の死であると。
曰く、この世界から抜け出すには唯一つの方法――このゲームをクリアする――しかないと。

最後に、「倒せるものなら私を倒してみろ！」と言い笑った後、魔王らしくも無い快活な笑い声を残して魔王は飛び去った。
今でも、この事件の原因はウィルシリーズの開発部では無くあの魔王だと言われている。というか間違いなく奴だ。

ゲームの世界に入る。なんて言うと聞こえは良いが、最初の頃は本当に苦労した。
何せ街から一歩でも出れば目が合っただけで失禁するレベルのリアルモンスター達がうようよ居るのだ。とてもじゃないが歩けたものじゃ無い。
勇気を出して歩き出したと思ったら、現れたのは１メートルもある

イノシシ。なんて事すらあった。ＲＰＧ的には雑魚だし、ステータスも低く確実に倒せる相手だが、迫力が違う。
始まってから１週間は無料開放されているボロッちい宿屋で他の犠牲者達と同じように布団をかぶって震えていた。
朝起きたら夢でありますようにと何度も祈った。いっそのこと死んでしまおうかと思った。

けれども、人間は慣れるものだ。なんだかんだ言いつつも１ヶ月後にはいっぱしのプレイヤーとしてこの世界でモンスターを屠っていた。
仕組みすら不明なゲームシステムの恩恵を受け、スキルを利用し、剣を振り、魔法を放つ。
そうして一部のゲームジャンキーやゲームに強い学生等を中心にこの世界（ゲーム）は攻略されていった。
４年の月日をかけて。
始まりから４年後。魔王城が攻略され魔王が打ち倒された。約８万人もの犠牲を出した挙句に魔王城は崩れ去った。

ゲームはクリアされたのだ。

だが、ここで思わぬシステムウインドウが全プレイヤーの前に現れた。
俺は魔王城攻略には関わらなかったが、あの瞬間は今でも覚えている。
あれは魔王を倒した後、攻略に向かっていたギルドメンバーと合流してギルドホームの大広場で飲めや歌えや騒げやのお祭り騒ぎをしていた最中に現れた。

“あなたは、この世界を去りますか？”

Ｙｅｓ　／　Ｎｏ

まっとうな人間なら――例えばゲーム開始直後からゲームオーバーによる理不尽な死を恐れて始まりの村に引きこもったままだった人間なら――Ｙｅｓ以外の選択肢はない。

８万人の犠牲は、４年間の月日は、この世界から抜け出すための物だ。この命の危険がある世界にこれ以上とどまるなんて、ここでＮｏを選ぶなんて狂っている。

だが、俺はまっとうな人間では無く、狂った人間（ゲームジャンキー）だったらしい。

なんだかんだ言ってこの世界に馴染み、元の世界以上にこの世界を好きになっていた。

だから俺はあの時――Ｎｏ　を選んだ。

そして俺は、今ここに立っている。

この世界、【終ってしまった幻想（エンディッド・ファンタジア）】に諦め悪くしがみついている。

５万人の馬鹿野郎と共に。

００――いつも通りのプロローグ（後書き）

……はい。
また始めちゃいました。懲りずに。
もう一個の方とかはきちんと終わらせますので。そちらのファン（本気でいるのか？）の人は待っててください。

01――気紛れの運命

草木がまばらにしかない高山道を下りながら、俺は先程手に入れた代物を手で弄んでいた。
「んー、何だろうな。コレ」
掌で握り込むには大きすぎ、けれど抱えるという表現は似合わない。それぐらいのサイズの鉱石だ。

「とりあえずアイテム欄を見てみるか……」
右手の人差し指を空中で一回転させる。
次の瞬間、視界の１／３ほどを奪い、【メニュー】が現れた。
灰色の背景に幾つかの文字列が浮き彫りにされている代物。デザインは石板の様な物の癖に、まるで立体感が無い薄っぺらな存在。
ＨＰバーその他パーソナルデータが浮いている左上とは逆の右上に、メニューウインドウが空中に浮いている。
もっとも、浮いていると見えているのは俺だけで他人から見えればそこには何もないのだが。
この世界にやってきた初めの頃はこの空中に浮かぶ文字列という物に強烈な違和感を覚えた物だが、今では日常の一部だ。

【メニュー】にある１０コほどの項目から迷わず【アイテムポケット】を選び、アイテム欄を表示する。
雑多に武器だの防具だの素材だのが放置されたアイテム欄の右下、一番最新のアイテムを見た瞬間、驚いて足が止まってしまった。
「アイテム名――竜鉱石、だとぉっ！？」

竜鉱石。
解析すれば最低でもクロムつまりは７ｔｈクラスは保障。運良けれ

ば９ｔｈクラス級の素材アイテムが手に入る可能性さえある最高の鉱石。
ダンジョンのボスや高レベルフィールドの固有名持ち（ネームド）モンスターから稀にドロップするものだと思っていたが……まさかツルハシで掘りだせるものとは思わなかった。

「よし、帰ろう。今すぐ帰ろう」
ゆっくりと景色でも眺めながら山道を降りるつもりだったが予定変更。即帰る。

「えーっと、【我が身我が魂の軌跡を此処に辿れ】」
いきなり訳の分からない単語が並んだが、別に急に厨二病が発病したわけでは無い。
ここは『剣と魔法』の世界であり、俺がメインに据えているスキルは、『魔法』である。
この世界で魔法を使いたいならば、各地に居る魔法使いを名乗るＮＰＣから【呪文（スペル）】を教えてもらい、それを必死になって覚える。という手間がある。
それでもスペルを一度覚えてしまえば後はそれを唱えるだけで多少のＭＰを代償に『魔法』を使うことが出来る。

俺がこの世界に残る事を選んだ理由の１つがこれだ。
まさしく厨二病で痛々しい、が１度でもファンタジーの世界に触れたことがある人間なら誰しもやってみたいと思うだろう。
ほんの少し言葉を操るだけで、火の玉を、氷の盾を、雷の槍を創りだす。
この感覚は、１度覚えたらスペルが体に染みついてしまうほど便利。
そして、その魔法の言葉は昼の少し前頃の空気に混じりシステムへと届く。

「【ログ・ワープ】」
システムに認知された魔法が発動し、俺の足元に光る魔方陣が刻まれた。と思った次の瞬間視界は真っ白に染まり意識が若干遠くなる。

再び視界が戻ると、そこは見慣れた店の入り口だった。
木造のかなり大きめのログハウスを改造して作られた店で、ついさっきまで俺が登っていた山をバッグにして眺めると中々の存在感を主張する構えになっている。
入口の脇に置いてある看板にはでかでかと下手糞な字で＜気紛れ製作所＞と書かれ、新参お断りどころか入れるもんなら入って見せろと言わんばかりである。
商売のことを考えるならきちんとした物に変えるべきだが、もし外したり塗りなおしたりしたらあのお姫様が暴走しかねないので止めておく。
まぁ、この店の雰囲気を一番伝えてくれるものなので、なんだかんだいって気に入っているのだが。

ともかく店の入り口のドアを開けて店の中に入る。
「今帰ったぜー」

朝早くそれも2時とか3時代に起きて、さらに数時間の憩いと労働の後という結構疲れた体にかけられた言葉はオツカレサマでは無く、
「シグレ遅ぇ！」
だった。
「酷ぇな。これでも帰りは即ワープして帰ったんだぜ？」
「知らん。そんなのはどうでも良い。腹減った」
声の主は店の机の1つを両足で占領しつつ、3つほど椅子を並べて、その上に頭の下に両手を敷いて寝っ転がっているプレイヤーだ。

プレイヤーネームはフゼイ。本名である風情(かざな)から取ったらしいのだが、果たしてこの女のどの辺に風情(フゼイ)があるのか教えて欲しい。
ノコギリを頭に刺したゾンビが刺繍された強烈な真っ赤なメガｚｉｐ仕様のパーカーに、極端に短くされたデニム生地のホットパンツ。
それがフゼイの日常服である。
戦闘時はその上に更に真っ赤なマントを羽織り、ハイド状態からいきなり現れたフゼイに敵が驚いてる隙にタガー系統のスキルで相手を一方的に屠るというプレイスタイルはまさしく暗殺者(アサシン)と呼んでいいだろう。
一見隠れるのには向かない赤色も、スキル【ハイディング】で隠れれば殆ど見えず、そして現れた時のショックは普通の色よりも強いという効果を狙ってのことだというのだから彼女もまた重度の狂っ(ゲームジャンキー)た者なのだろう。

「朝飯、超特急で作れ！」
……まぁ、後付けで思いついただけで単純に赤色が好きなだけかもしれんが。正直この馬鹿がゲーム効率とか考えてる気がしないし。

「はいはい。ただいま作りますよっと」
ちなみにシグレとは俺の事。
本名である時雨(ときあめ)から時雨(シグレ)と名付けた。が、あまりにもあまりな本名なので時折どっちがどっちなのか分からなくなる。
俺達の親世代が名付けていた時代はそういった考え抜かれた名前がたくさんあったと言うが、子供としてはそこまで気に入る名前ではない気がするのは気のせいではあるまい。
俺が子供を作ったら名前は簡単なのにするだろうな。「健人」とかその辺の。

そんな事を考えつつ、【メニュー】から衣服関連のショートカット一覧を呼び出し、鉱石掘りの時用の作業着から軽い日常服に変えた

後、エプロンを追加装備して台所に入る。
「どんなものをご所望で？」
「いつもの！」
「りょーかい」

台所に立つと、空中にウインドウが現れる。その真ん前に立って【クッキング開始】を選択。すると、目の前に専用の料理メニューが現れた。
「えーっと、ハンバーガーにフライドポテト。それから俺用のサラダと焼きおにぎり。そんなもんかな」
まずは手持ちのレシピから作りたい料理を選択。
「素材は店の倉庫から、っと」
そして素材を指定。
決定を選択した直後、ゴトンと言う音と共に加工された材料が目の前の料理器具に入る。
「さぁて、さっさと作っちまいますか……」
そして、材料の並んだ調理器具の上にウインドウが現れる。

「【クッキング】を開始します」
無機質なシステムボイスが響き、目の前で素材達がシステムによって刻まれ、料理に適したサイズへとなっていく。
こちらはある程度の指示と、それから調理の材料を入れるタイミングだけでいい。
果たしてこれを料理と呼ぶのかは甚だ疑問だが、個人的には一から作るより遥かに楽でいい。
元の世界では包丁を握っていたこともあった憶えがあるが、包丁など感覚を忘れてしまうほど握っていない。皮肉な事に刃物は毎日の様に握っているが。
「さて結果は……９２。まぁ、適当な割には上出来かな。少し焦げ

たが」
「何でもいーから早くしろー！」
カウンターの向こうから、フゼイの声が響く。
「はいはい。カウンターの上にに実体化させるから取りに来い」
言いつつ、リザルト画面を閉じると目の前に料理がトレーに乗っけてられて現れる。
「ちっ……」
「舌打ちすんなよ。たった数歩だろうが」
「ちっ！」
「なんでさらに大きな音で舌打ちしてんの！？　調理したの俺だぜ！？」
「ちっ、どうせタイミングゲーの癖に威張りやがって」
「そうだよタイミングゲーだよそのタイミングゲーの１ｔｈクラスすらクリアできないお前に言われたかねぇ！」
「んだと――」

「お、なんだなんだ。喧嘩か？」
カウンターを挟んで罵り合いをしていた俺とフゼイに新しい声が割って入る。

入口に立っていたのは、枯葉色のトレンチコートに身を包み身長程はあるだろう巨大な銃を背負った背の高い痩せた男だった。
「お、何だサキモリ。今日到着だったか？」
目の前で再び怒りだそうとしていたフゼイを無視しその男に声をかける。
男の名前はサキモリ。こっちも本名の防人（ぼうと）から取った名前らしい。
そのあごひげを伸ばした顔は、一見３０代すぎに見えるがこれでもれっきとした２４歳である。
「ははは。何だ邪魔だったか？　痴話喧嘩中なら外すが」

「馬鹿言うな！」
サキモリの言葉に顔を真っ赤にしてフゼイが反論する。
つくづく赤が似合う奴である。
「久しぶり、か？　こないだ会ったのは1ヶ月前だったか」
「まぁな。大分長い事、【羽音の洞穴】に籠ってたからな」
【羽音の洞窟】とはここから南に大分言った所にあるダンジョンで、群れる敵が少なくシステム上の安全地帯が多い事から遠距離攻撃職のレベル上げに定評のある場所だ。

「ほれ、例のモン幾つか取れたぜ」
カウンターにどっかと腰を下ろしたサキモリが、コートの内ポケットから黄色の羽のような形をした鉱石の欠片を3つテーブルに置く。
サキモリにはついでに素材を取ってくるよう頼んでいた。幾つかの洞窟の奥地でしか取れない翼鉱石だ。
「お、ナイスタイミング。今朝竜鉱石がたまたま取れてな。こりゃ良い合金が出来るぜ」
「そりゃ良かった。ところで、飯は残ってるかな？」
「ああ、そこに置いてあるハンバーガーとポテトは食べちまっていいぞ」
「え？　ちょ、それアタシの」
「それじゃ、遠慮無く」
咄嗟にハンバーガーに手を伸ばしたフゼイの手を遮るようにサキモリがハンバーガーの乗ったトレイを引き寄せる。
「いやだからそれはアタシのだって――」
サキモリからハンバーガーを奪い取ろうとするものの、枯葉色のコートとサキモリの手が邪魔をして届かない。
「お前はお腹空いてないんだもんな。別に食べなくてもいいよな」
笑いながら俺が言う。
「なるほど、フゼイはお腹減って無いのか問題無いだろ」

それに乗ったサキモリが、フゼイの手を防御しつつハンバーガーに齧り付く。
「な、ちょ、分かった、ケチ付けたのは謝るから、あーっ！　アタシの朝飯がぁあああ！」
「うん。上手い。こんなハンバーガーが食べれないなんてフゼイも残念だな」
「そうだなー。俺は焼きおにぎり貰ってこう。サラダなら食っていいぞー。俺は翼鉱石を加工しに行くから」
「なっ！　朝からこんな葉っぱの切れ端だけで動けるかーっ！」
フゼイの怒声を聞きつつ、俺は店の奥に引っ込んだ。

02――金剛色の輝き

このログハウスは2階立て＋地下室という構造になっている。
2階が俺やフゼイを始めとした何人かが泊まっている宿屋。
1階が食事屋であるバー。
そして地下1階が俺の鍛冶屋（スミス）としてのメイン活動場所である、鍛冶屋だ。

店の奥にある階段を降り、すぐ右手のドアを開く。
そのドアの先には俺が完璧に占領している俺専用鍛冶設備が広がっている。
ドアから見て右手には作業台が幾つか。さらに奥には回転砥石や特殊アイテム用の装置が並んでいる。
左手には素材を入れてある簡易倉庫、その奥には火が赤々と燃えている炉と金属を叩くときの金床。
本物の金属加工の設備と比べれば規模は落ちるのだろうが、この世界で金属を加工する分には十分な大きさだ。

「さて、まずは解析から始めるか」
焼きおにぎりを齧りつつ、アイテムポケットから竜鉱石を取り出し、翼鉱石と一緒に作業台の上に置く。
その後、壁にかかっているルーペを取り、【メニュー】から鍛冶系統のスキル一覧から【アナライズ】を選択しルーペを覗き込む。
すると、ルーペに無機質に映っていた鉱石が若干半透明になり中にある物が透けて見え始めた。
この色から、中身を判別するというのがスキル【アナライズ】である。
「黄鉱石の方は間違いなく【クレイリス】と【レスティニア】だが……、緑鉱石の方は……こりゃ、【水晶】か？　けど5ｔｈクラス

が竜鉱石から出る訳も無いし……」

鉱石から精製できるインゴットは数多くあり、鉱石1個からランダムに1種類のインゴットが精製できる。
ただ、鉱石からインゴットを製作する際には金も技術も時間もかかるので、大概事前に【アナライズ】で中身を確認してからインゴットにする。その方が面倒でも効率がいいからだ。
また、あくまで傾向だがモンスタードロップや特殊な場所で【ピック】以外の方法で手に入る鉱石には架空の名前が付いたものが多く、鉱脈からツルハシで掘りだした鉱石には実際にある金属の名前が付くことが多い。
もっとも、実在金属の方は【金】【銀】【銅】【鉄】【亜鉛】【鉛】【アルミニウム】【スズ】【ニッケル】【クロム】辺りで開発陣が諦めてしまったらしく、それ以外は【水晶】だの【ルビー】だのそれ金属じゃなくて宝石だから！　とツッコミが来そうな名前が並んでいる。果たしてどうやって原料【エメラルド】のみで剣を造るのかなどとは聞いてはならない。他にもハズレである放射性金属を使って武器を創ると持つだけで毒状態になるなんてネタがあったりするレベルである。

「とりあえずハズレって事は無いだろうしな。精製してみるか」
焼きおにぎりを口に咥えて、空いた手で緑鉱石と黄鉱石を精製機に放り込む。
現実の金属なら各金属用の精製機があるがこのゲームの世界にそんな面倒な物はない。共通の精製機に鉱石を突っ込んで幾らか通貨を払えばインゴットにしてくれる。自家用装備の癖に金を食うのが難点だが。

「さて、それじゃその間に幾つか準備を、と」
壁のスイッチを入れ、炉に火を入れる。この火はそのまま上の階の

床にあるパイプと繋がっていて、そのまま煙はログハウス中を温めた後に煙突から排出される。
何とも無駄に現実的で便利な機能である。おかげで気の早いときは秋ごろから雪が降るこの山複でも年中暖かい。
「後、核は緑鉱石の謎鉱石としてもサブで銀を幾つか混ぜておく必要があるな……」
各種インゴットが雑多に突っ込まれている箱を開き、表示されたアイテムメニューから銀のインゴットを取り出す。
白鉱石から出る一般的な金属で、６ｔｈクラス品だが無駄にレベルが高い奴だけが残っているこの世界においては余り貴重な物では無い。

とかなんとかしているうちに、精製機の方からピーーーという音が流れた。
「はいはい。今行きますよ、と」
インゴットをひとまず近くの作業台に置き、精製機の方に近寄る。
いつもなら結果も見ずにすぐに取り出すのだが今回は謎の緑鉱石が中に入っている。
取り出す前に、精製結果の映っている半分ゲーム化した液晶モドキに目を向けた。
そして、その精製結果を見て愕然とした。

「精製結果――【クレイリス】【レスティニア】……【アダマント】お！？」

【アダマント】。日本語で金剛。要は、ダイヤモンドの事。
「……マジ、で？」
精製機の下の受け皿から精製されたインゴットを取り出す。
若干濁った銀色、これは【クレイリス】。さらにこの青色がかった奴は【レスティニア】。

そして、その隣にあるのが……。
「ダイヤモンド……」
カットはされていないためあまり輝いてはいないが、それでもその透明度はまさしくダイヤモンドだった。
「……嘘だろ」
そりゃ鉱脈系からは宝石の類だって出る。後ろの簡易倉庫には【ルビー】だの【サファイア】だのが幾つか入っている。
過去に緑鉱石は１０コほど精製したが、それでもダイヤモンドなんて見たことは無い。
５年間。十分に長い間この世界に居て、数々のインゴットを見てきたと自負する俺ですら見たことが無いインゴットである。

「はは、すげぇや」
思わず、感動に浸ってしまう。
長い長い間この世界で生きて、それでもまだこの世界は新しい物を見せてくれる。
素晴らしい事ではないか。と、驚嘆してしまう。

「うぁ～。シグレぇ……、もうそろそろ機嫌治して飯作ってくれよぉ……。肉が喰いてぇよ肉が」
と、ジーンと来ていた俺の背後からフゼイが降りてくる。
「流石に可哀そうだぞー」
それにサラダの入ったボウルとミニトマトが刺さったフォークを持ったサキモリが続く。

「ん、何だシグレ、固まっちまって。失敗でもしたのか？」
「いんや。大成功」
俺の手の中を覗き込みながら聞いたサキモリに首を振りながら答える。
「それじゃあよ、ちょっとそれに免じて朝飯をだな――」

「これ、ダイヤモンド」
不愉快そうな顔をしたフゼイの言葉を遮り、【アダマント】の透明なインゴットをフゼイの目の前に突きつける。
「「……は？」」
「おお、ハモった。珍しい」
ぽかんとした顔をして並ぶ2人に吹き出しそうになりながら指摘する。
「え、え？」
「それ……ホントに？」
だが、そんな皮肉すら通じないほど2人は驚いているらしい。
「ホントホント。マジもんのダイヤモンド素材。たった今竜鉱石から精製できた代物だぜ？　ランクは堂々の９ｔｈ。まさしく最硬の金属に相応しいと思うぜ」
「こ、これがダイヤ、モンド……」
「何だよやらねぇぞ？」
【アダマント】を引っ込めても、まだフゼイの目は釘付けのままだ。サキモリの方は正気に戻ったようで若干赤い顔をしながら【アダマント】を眺めている。
「う、うん……」
「ほれ」
右手に握られた【アダマント】を軽く振る。
「……」
「ほれこっち」
それに合わせて、フゼイの朱い2つの目が動く。
「……」
「そんな顔すると、く、ふ、ぷっくぁあはははははは！！」
魂の抜けたような顔で、【アダマント】に釘付けになってるフゼイの顔が余りにも可笑しくて、ついに吹き出してしまった。
「な、なに笑ってんのよ」

その笑い声で正気に戻ったフゼイに睨まれてしまった。
「悪い悪い。あんまりにもお前らの顔が傑作で」
「な、ななな何言ってんのよ！　喧嘩なら買うぞ！」
再び顔を真っ赤にしたフゼイが怒鳴る。
「おお怖い怖い」
「あ、アンタぁぁあああ……！」
「まぁ待てフゼイ。それにシグレもあんまり煽るな」
注がれた油を見事に燃やそうとしていたフゼイを先程まで黙っていたサキモリが止めて、こう提案した。

「ところで、こんな貴重な物をここで使うってのはどうなんだ？
なんか、本格的な所に行かなくていいのか？」
「ここは十分本格的な鍛冶屋、なんだけどな。まぁ、……そうだなどっか街のドデカい炉で鍛えるか」
余計な一言に少し職人のプライドがカチンとしつつ、その提案を飲む。

ある程度以上大きな街ならば、必ず鍛冶屋があり、そこである程度の代金を払うと炉を貸してくれる。
普通のプレイヤーや専用設備を持たない鍛冶屋はここで武器を鍛えたり修復したりしているのである。
炉は基本的にどの街でも大きさは同じだし、そもそもここにある炉と街の炉の性能に差は無いのだが、非鍛冶職プレイヤーからは街の鍛冶屋の方が大きく見えるらしい。

「折角の【アダマント】だし。そう考えると材料もこの【銀】や【レスティニア】とかじゃあもったいないな」
出しっぱなしにしていた幾つかのインゴットを空いた方の手で撫でる。
こいつ等も十分に良い金属なのだが、数年に一度であるか出会えな

いかの金属と釣り合うかと聞かれれば答えはノーになる。

「炉……ねぇ。確か【ラピス】に有った筈。あそこが一番かな」

「【ラピス】、か。懐かしいな」

「そうだねぇ」

歓待都市【ラピス】。

所謂ゲームの始まりの街、にしてこの世界で４つ目に大きな街である。

これもウィルシリーズの共通点でもあるのだが、始まりの街だからと言って別に寂れていたり世界の端っこにある街であったりする訳では無く、十分に賑わっている都市である。

大きさに比べ人口はかなり多く、この世界で2位。それも1位とほぼ同格と言う恐ろしいほどの人口密度を誇る。

イメージとしてはアメリカか中国辺りにありそうなデカい都市の様な街で、様々な人種の人々がごった返しの中生活している。街を歩けば白い肌黒い肌はもちろん角があったり尻尾があったり翼があったりと不思議な姿をしたＮＰＣ達とすれ違うことが出来る。

中央には【ラピス】の貧困層対策なのか、それともゲーム上の仕様なのか、無料の宿屋が大量にあり過去にはそこでかなりの人数の非参加プレイヤーが生活していた。

他にも、それなりに大きい各種店がある。今ならば非参加プレイヤーから冷たい視線で見られたりすることなく利用できるだろうし、問題無いだろう。

これがクリア前だと、街内に大量の非参加プレイヤーがいて恐らく街中での移動すらままならなかったのだが。

「それじゃ、さっさと行こ――」

ぐるるるるる。

俺のセリフが、フゼイの腹の音に掻き消される。

「……あー、そういえば腹減ってたんだっけ」
「……飯。肉。飯肉飯肉飯肉」
「分かった分かったステーキ作ってやるから。興奮すんな」
「はははははは」
俺のフゼイを宥める声に、サキモリの笑い声が重なった。

０３――ゲーム少女の葛藤

俺がわざわざ２０分もかけてじっくり作ったステーキをフゼイが僅か5分で平らげて、ステーキをもう1枚焼く焼かないの喧嘩をした後。
俺達は今まで行った事のある街に飛ぶ魔法、【シティ・ワープ】を使って【ラピス】へと移動した。
ちなみにワープ魔法の半分ほどは、自分の周り数人を巻き込んで移動することが出来るという仕様を持つ。
勿論、その時はワープする全員がその町に行ったことが無いと駄目だが、当然ここに居る3人は全て【ラピス】へ行ったことがあるので問題は無い。

「さて、そんな訳で【ラピス】に到着だ」
足元の魔方陣の光が消えたのを確認した後、街へと足を踏み出す。
後ろを振り返ると、巨大な門とそれの両端から伸びる城壁が見えた。
どうやら丁度街の門の真ん前に出たらしい。

【ラピス】内は、3つの場所に分かれる。
1つは中央部。非参加プレイヤーが寝泊まりしていた無料宿や簡単な飲食店、雑貨店などが並ぶ。
2つ目は行政部。この世界のでは珍しい役所の地域、と言う設定で、ようは各システムの設定およびメンテナンス部だ。この世界ではウインドウカラーだのウインドウサイズだのはここでしか変更できないから、地味に重宝する。
そして3つ目が商店部。専門店やオーダーメイドの武器防具屋が並ぶ。俺達が用のあるのはここだ。

「えーっと、だから。確かこっちだった筈」

うろ覚えの地図を頭の中から引っ張り出しつつ歩く。
【ラピス】は早々に非参加プレイヤーに占領されてしまったので、それなりに攻略に貢献していた俺やフゼイ等の高レベルプレイヤーは他の都市をベースとして使っていた。原因は、非参加プレイヤー達の目線、だ。別にそれが物理的にどうするわけでもないのだが、街中どこ行っても視線を浴びるというのは嫌な物だ。おかげで、【ラピス】の地形に関してはあまり詳しくない。

門前からすぐ右手に曲がると、その先にはレンガを積み重ねて作られた建物が雑多に並んでいる。
ＮＰＣ達の活動の賜物なのか、街は常に清潔に保たれてるため最初に来た時と道や建物はほとんど変わっていない。
「こういう所はゲームっぽいよなぁ」
「ああ。けど、それを構成するＮＰＣには意志がある。不思議なトコだよ」
俺のほとんど無意識の呟きに、サキモリが答えた。
「ほんとにな」
柄にも無い事を言った自分に少し驚きながら、辺りを見回す。

少し前を歩く3人の親子。子供がアイスクリームを買ってくれと父親にせがんでいる。
すぐ右手で店の入り口の掃き掃除をしている青年。恐らくその後ろの店の店員だろう。
左の建物の窓を覗けば、作業着を着た女性が機織りで布を織っている。

「ＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラクター）、か」
彼らは魔王（ラスボス）を倒すために異世界からやってきた勇者（プレイヤー）では無く、この世界の住人。
彼らの視界の左上にはＨＰバーは無く、彼らの人差し指を振っても

メニューは現れない。
そういう意味ならばプレイヤーでは無いのだろうが、果たして彼らと俺達に何の違いがあるのだろうか。
彼らは俺達（プレイヤー）に必要以上に接しては来ない。飽くまで街の店員として、ただの他人として接してくる。
だから店に入った時の掛け声は【いらっしゃいませ】で統一され、街で話しかければ【ここはラピスの街です】というお決まりのセリフを繰り返す。
どうして、何故――
「おい、シグレ！　聞いてんのか？」
突然のフゼイの声に思考が途切れる。
「ん？　あ、あぁ？」
「そんなに怒鳴らなくても……、まぁいいか。それで、お目当ての場所はここじゃないのか？」
サキモリとフゼイの目の先を追ってみれば、そこには巨大な煙突がいくつも立つ巨大な町工場風の鍛冶屋だった。
どうやら、気が付かないうちに到着していたらしい。

「【マーチャの街工場】……あぁ。ここで間違いない」
目の前にかかってる金属板の看板を確認しつつ、答える。
ちなみにこの世界の言語は日本語。ウィルシリーズが日本製で本当に助かった。アメリカ製だった間違いなくスラングの英語は読めないという自信がある。

「マーチャ、って誰？　そして街工場って何？　漢字間違ってない？」
恐らく初見の全ての人間が思う事を、フゼイのツッコミが代弁した。
「さぁな。ＮＰＣの商店の名前に意味なんかあると思うか？　【グローム・ウィル】と同じなら製作者の言葉遊びだろうし、そうじゃないならこの世界のマーチャさんが創ったんだろう。確か、【ラピ

ス】の商店は全部こういう系統のネーミングだった覚えがあるが」
「多分製作者ネーミングだと思うぜ。【レイグズ・ウィル】にも似たような名前の店のシリーズがあった。まぁゲーム屋にネーミングセンスを求めるなよ」
俺とサキモリが答えるも、フゼイは少し不満気だ。
「えー、でももうちょっと、何か、無かったの？」
「【気紛れ製作所】の看板を出してる俺らが言える言葉じゃないけどな」
「ははは、違いない」
「まぁ、それもそっか」
3人でまったく同じとある女性プレイヤーの事を思い出しながら、俺達は【マーチャの街工場】の重い金属扉を開いた。

・・・・μ・・・・

東雲紅葉（しののめくれは）は悩んでいた。
「ん～～～～～～～」
具体的には現在の頭の5／6ほどがその悩みで埋め尽くされるほどには。

今、自宅の子供部屋の床に直に座っている、紅葉の前には2つの物が置いてある。
1つは、数学の問題集。提出期限は明日で、そして中身は半分ほど真っ白だ。
そしてもう1つは、いつもは仕事の関係で海外に居る兄が珍しく家に帰ってきて、そのお土産にとくれたゲームソフトだ。
『グローム・ウィル』というそのソフトは、『ウィルシリーズ』と

いう名前にウィルのついたゲームソフトのシリーズで、今では黄金だの完璧だの神だのと呼ばれ惜しまれている製作陣が5年前の解散前に最後に造り上げたウィルシリーズの幻の一作だ。初期ロットのみが製造されたため精々３０万本しかないというその超激レアの代物は、公式発表によれば発売直後企業によって全て回収され４年前には開発途中の各システムすら完全に破棄されてしまった、とされている。
具体的に価値を表すなら、今この目の前に鎮座している四角い箱を売れば数万数億は下らないと言った方が分かり易いか。
もっとも企業によって回収指定にされているのでネットオークションなどに出す訳にはいかないし、そんな事をしようとしたらたとえ兄であろうと問答無用で気絶させてみせるが。

「ん～～～～～～～」
と言う訳で、紅葉は猛烈に悩んでいるのだ。
その証拠に、今も耳元で悪魔と天使が言い争っている。

『あの、伝説のグローム・ウィルが目の前にあるのに何を戸惑う事がある！　この機を逃したら下手したら一生できないようなものだぞ！』
『何を言いますかこの悪魔は。数学の問題集こそ今真っ先にやるべき物でしょう。ゲームにプレイ期限は無くても問題集には提出期限があるのですよ？』
『なんだと！？　ゲームにだってプレイ期限はある。　お前だって経験したことがあるだろう？　長い長い行列を並んで予約券をもらって何とか発売日に買えたけどその日はたまたま用事が入って忙しくて買うだけ買ったけど手つかずで数日後に回したらまた新しい新発売が出てそちらをやっている間に熱が冷めてしまって結局積みの列に入れてしまうとか。発売日に買おうと思ったら売り切れでまた明後日来いと言われその日に行ったらまた売り切れを繰り返してい

くうちにいつの間にか2週間以上たってしまっていていつのまにかネタバレがネット中にばらまかれてラスボスの正体を知ってしまって萎えたとか。気合入れて発売日に買ったは良いけどその日中にクリアできずに寝たら次の日に同じゲームの購買者と出会ってその先の展開を盛大にネタバレされてやる気がそがれたとか。あるだろう！！？』

『なんだか別の意志的な物が宿ったような凄い反論ですね……』

『おうよ！　ゲームは買った当日にやるのが正義ってもんだ！』

『悪魔が正義を語ったら意味ないでしょう！？』

『あぁ！？』

『ひっ！　いや別に正義が天使の物とかそういう意味でなく確かに最近のＲＰＧはダークヒーローが人気ですけどでもやっぱり正義は天使の物かなぁと』

『別にそれは構わねぇ！』

『構わないんですか……』

『けどな。たとえ俺が悪魔であろうと！　悪であろうと！　これだけは譲れねぇ』

『ゲームは買った当日が吉日だ！』

「……」

気が付いたらなんか悪魔が松〇修造ばりに熱く語っていた。そして天使は若干、いやそれ以上に引いていた。

『たとえどんなクソゲーだろうと！　ゲームは！　買った日から不眠不休でやるべきである！』

「……ま、いっか」

悪魔の熱意を少しウザいと感じつつ、けれどその気持ちの半分くらいは自分の思ってる事と同じだと言うのに気が付いて、結局右手が伸びたのは『グローム・ウィル』のパッケージだった。

ほんの、ちょこっと、ちょびっとだけ『グローム・ウィル』やって、それから数学の問題集を終わらせよう。
うん。そうしよう。
それできっと問題は無い。

まぁ最悪徹夜すれば問題無いさー。とか現実逃避しつつ数学の問題集を机の上に押しやり、子供部屋用の小さなＴＶを引っ張り出して各端子を繋げる。
『つまり、だからこそ！　全てのゲームは燃え尽きるほどの覚悟を持ってふんぎゃっ！？』
「五月蠅い」
後、面倒になったので悪魔は右手で叩き落した。
『ひどい……』
「えーっと、ここにディスクを入れて、と。うーん古いからロード長いなぁ」
ＤＬ販売の物では決して聞けない独特のディスクの回る音を聞きながら、各種セッティングを終わらせる。

聞きなれたハードの起動音が、久しぶりのゲームなんだという事を思い出させて、急に心臓の鼓動を高めさせる。
最近はゲームパッドとしか使っていないコントローラーも、本体と接続したからか今日は随分と調子がいい。

「さて、どんなゲームかなぁ。自由度が高いって聞いたけど。思いっきり楽しめるといいな」
まだ見ぬ世界に思いを馳せながら、私は『グローム・ウィル』を起動した。

そして、数分後、私は強烈な頭痛と共に意識を失った。

０４――終わったはずの物語

「さて、それじゃ……」
「ああ」
「おう」

【ラピス】の【マーチャの街工場】でお願いして、炉を貸してもらった後。
俺達は、約５時間の喧嘩の末創る武器を【大剣】に決めた。
【杖】を支持する俺と【重銃】を支持するサキモリと【短剣】を支持するフゼイの３人に分かれてしまって、有り得ないほど会議が長引いた結果、３人の武器と全く関係なくさらに姫様その他のバトルジャンキーにも関係ない……という条件で【大剣】となった。
俺が見つけた鉱石なのだから、【杖】かせめて【魔導書】にする権利ぐらいはあるのだが。
【魔導書】と言った瞬間、サキモリとフゼイに同時に睨まれて、「「それだけは駄目だ」」と怒られてしまったので妥協した。

何処までも妥協せずに選んだせいで、素材は【アダマント】をベースに据えて９ｔｈクラス【金】と７ｔｈクラス【ラピスラズリ】を色と効果の面からチョイス、さらに８ｔｈクラス【アンフィリッド】と８ｔｈクラス【ガリアルーシュ】を混ぜて強度と切れ味を強化、という有り得ないほど豪勢な代物となった。
具体的にはこの大剣１本で下手したら城１つ買えるほどである。
さらに一応鞘も７ｔｈクラス【エメラルド】と６ｔｈクラス【クロム】で創った物をサイズ調整して使う事にした。
お値段的にはただの城が広大な庭付きの城になるぐらいだと思ってくれればいい。
もっとも、あくまで全て例えとなってしまうのだが。なにせこの世

界にある6つの城は既に買い取られてしまっているからだ。
まぁ何はともあれ。なんだかんだ言って剣は出来上がったのだが、ここでまたしてもフゼイが我儘を言い出して、ここ以外の場所で完成させたいと言ったのだ。
……フゼイにしては妥当な場所だったので採用したが。

そんな訳で。
俺達は、【ラピス】の街のど真ん中。
5年前に俺達が集まった超巨大な大広場の真ん中で、剣に宝珠を埋め込んで完成させることにした。

「たかが宝珠。されど宝珠。剣自体は形になっててても、この宝珠が上手くはまらなければ意味ないからな？」
「はいはい。分かってるって」
ここに来るまでに3，4回は言った事を繰り返す。
別に剣を創る際に移動に移動を重ねる羽目になった事に怒ってなど無い。断じて無い。個人的にフゼイが優柔不断なので注意しただけである。

「さて、それじゃ……」
「ああ」
「おう」

剣を台座に置き、宝珠を上に置く。
愛用のハンマーを掲げ、丁度宝珠の真上になるように調整する。
「ハァッ！」

直後、色んな事が同時に起きた。

振り下ろされるハンマー。
急に光りだす地面。
忽然と消えゆくＮＰＣ達。
驚いた顔のままのフゼイ。
一瞬で周囲を警戒するサキモリ。
剣から目を逸らさないシグレ。
そして。

そして、振り下ろされたハンマーに、突如としてぶつかった、
……
モミジ。

終ってしまった筈の物語は、再びそのページを捲られる。

新たな来訪者と共に。
新たな小さな物語が、始まる。

・・・・　終ってしまった物語（エンディット・ファンタジア）　・・・・

０５――有り得無い筈の初心者

「おーい。起きてくれー」
「痛つつつ……」
「あ、起きた！」

…アレの後。
こういった瞬時の出来事やいきなりのイベント、サプライズエンカウント等に耐性がある俺達は速攻で復帰したのだが、謎のプレイヤーは俺のハンマーの一撃をまともに喰らい、気絶してしまった。
その後、色々と相談した結果、とりあえずＮＰＣ避けを持続したまま謎のプレイヤーが目を覚ますまで待つことにした。
そして、３０分後。
謎のプレイヤーは目を覚ました。

「……はぇ？」
この、目の前で呆け顔をしている少女は初期プレイヤー用の白いＴシャツに茶色のベスト、茶色のスカートという格好をしている。
腰に刺さっている武器も見た所、【ノーマルソード】と言う名前の初期装備とみて間違いない。
……そんな事、有り得るはずが無いのに。

「……気分は、どう？」
サキモリは女嫌いで、フゼイは顔見知り、というわけで俺が最初に声をかける事に決めたのだが……、今になって全力で後悔している。
台詞がまるで柄にあって無い。後ろで見ているフゼイとサキモリにこの後顔を向ける気が起きないほど恐ろしい。
最も、今はそんな事気にしていられない時でもあるが。

目の前の呆け顔の少女は、現状が分かって無いのかしばらく俺の顔をぼんやりと見つめた後、急に目が覚めた。
「は！？」
「起きた、かな？」
出来るだけ刺激しないように謎の少女に話しかける。
「え、あの、その、……誰、ですか？」
少女は、眉をひそめながら一応口を開いた。
「俺の名前は、シグレ。綴りの方はｓｉｇｒｅ。呼び捨てで構わない」
【メニュー】を開き、プレイヤーの性別やレベルなどが書かれた【プレイヤーカード】と呼ばれるアイテムを、ステータス画面から作りだし、謎の少女に渡す。

「え？　今何処から！？　何これ……レベル？」
それを受け取った少女は、【プレイヤーカード】をまるで初めて見たかのように珍しそうに眺めた後、その中に書き込まれている情報を見てぎょっとした。
「……」
謎の少女の予想外の、いやある意味予想通りの反応に、サキモリが音をたてずため息をつく。
「やっぱり、か」
俺が、呟くように言うと、プレイヤーカードを見つめていたその少女は、急に顔を上げて聞いた。
「ここは、何処ですか？」
その、冗談ですよね？　と聞きたそうな目に見つめられながら、恐らくその少女が想像している答えと同じものを返した。
「【グローム・ウィル】。またの名を、【エンディット・ファンタジア】」

・・・・・α・・・・・

「つまり、私は、【グローム・ウィル】にそっくりな世界に飛ばされてしまった……って事？」
「ああ、その通り。理解が早くて助かるよ」

いつまでも中央広場のど真ん中の地面に座ってるわけにもいかなかったので、とりあえずモミジと名乗った少女には広場の端っこにあるカフェへと移動してもらった。
ＮＰＣのカフェだが、店員がプレイヤー慣れしているのかそれともデフォルメ設定が良いのか、割と対応が良いのが特徴の店で、ここ以外でゆっくりくつろげるカフェとなると少し歩かなければならない。
……これで、出来ればコーヒーの味も良ければ最高なのだが。

少女に１時間以上かけて一通りのこの世界についての知識と顛末を話した後、今度はこちらから幾つか聞いてみる事にする。
「それで、モミジ、さんはどうしてこの世界に来たのか、身に覚えはある？」
まだ頭が痛いという少女には、頭痛に聞くというハーブティーを飲んでもらいながら少しずつ今までの事を思い出してもらっていた。
「ええと、多分……家で、【グローム・ウィル】を起動したのが原因だと……」
「【グローム・ウィル】がまだ出回ってるのか！？」
サキモリが少女の言葉に驚いて、声を張り上げる。
だが、それが原因で少女が縮こまってしまった。
「サキモリ。気持ちは分かるが大声を出すな。モミジ、さんが困っ

てるだろ？」
「い、いや。その……兄さんが、海外で拾って来たっていう物で、……その、メーカー回収指定だとは知ってたんですけど。ちょっぴり、ほんのちょっぴりだけやってみようかなと思って……」
まるで悪戯を見つかった子供の様な言い訳に苦笑しながら、俺は目の前の少女に過去の自分を重ねていた。
「俺もだ。待望のウィルシリーズ新作発売！　っつー店頭広告に引かれて、参考書投げて衝動買いしちまった」
「へぇ。シグレはそんな経緯で【グローム・ウィル】買ったんだ」
人見知りして黙り込んでいたフゼイが後ろから声をかけてきた。
「あれ？　話してなかったか？」
「……初耳」
「そうか。まぁ、前の世界のことなんて話してないしな」
不味いコーヒーを啜りながら、フゼイの機嫌が大分悪くなってるなーと感じる。今夜の献立は肉中心にしておこう。

とりあえず初見の相手だと口を利くどころか目も合わせられない奴は放っておいて、目の前の女性プレイヤーに向き直る。
「それに、メーカー回収指定って事は、初期３０万人以外は【グローム・ウィル】を起動できなかって事だろ？」
「はい。発売直後にすぐメーカーが徹底的に回収してしまって……当時はいろんな噂が流れました」
「だろうなぁ。そしてその実態がまさかの３０万人の失踪とは誰も思うまい。まぁ、失踪をいち早く知って情報規制をしたメーカーと警察には感謝だな」
「それに、丁度１年前ぐらいにメーカー内に保存されていたマスターデータすら破壊されたと公式発表されて……」
「……そうか。アイツら、ちゃんとやってくれたか」
１年前。それは、このゲームがクリアされた瞬間。
元の世界に帰って行った１７万人は、その責務を立派に果たしてく

れたらしい。
「……良かったな」
「……あぁ」
俺達残留プレイヤーはある意味で、目の前の少女の様な、想定し得る新たな犠牲者たちに関しては責任を放棄したこととなる。
元の世界に戻ってやれることはあったし、やるべきことはそれ以上にあったのだから。

「まぁ、アイツらは責務を果たしたけれども、新しい犠牲者が出ちまったんだがな」
懐かしい面々の思い出を一旦頭の片隅に投げやり、目の前の新たな犠牲者に向き直る。
「す、すいません」
若干話に置いてかれつつも、大体の流れは把握できてるらしい。中々に頭の回転が速い子だ。
「ふぁ～ぁ……ん？」
そして、もう1人の少女の方は実に暇そうに欠伸をしていた。
この少女の頭の半分でもフゼイにあれば……。

「モミジ、さんは謝らなくていいよ。俺だって、きっと目の前に幻のＲＰＧがあったらプレイしてた。間違いなく。それよりその後だ」
「その後は……謎の頭痛に巻き込まれて、気が付いたら、ここに寝てて」
「謎の頭痛は俺にも起きたな」
「アタシも」
どうやらあの、頭が割れるような痛みは全員経験済みらしい。

「あ、でもなんか頭が痛くなるのは2回ありました」
「……まぁ、その話は後にして」
「はぁ……？」

い、いや、別に、記憶無いからと言って自分の罪を無かった事にしようとなんか、してないよ？
「そ、それより――」
「2回目はコイツが原因だからな。なんならコイツに殴り返してやれ」
けれど、淡い希望もはかなくフゼイの一言が真実を告げた。
「あ、ちょ、おま……」
なんでこうタイミングよく覚醒するかなぁ！　こいつは。
そしてこう、この状況でそれを言うと空気が悪化するとか、そういう事も考えてないんだろうなとか色々と言い訳と愚痴を並べつつ、表面では平常心を保つ。
「えーっと、気絶する寸前に見えたハンマーはもしかして……？」
「……はい、俺です」
「思いっきり、全力でやられた気がしたんですけど」
「……誠に、申し訳ない」
カフェの椅子は西洋椅子なので土下座は出来ないが、出来得る限り頭を下げる。
フゼイなら殴るどころか決闘挑まれて最高威力のスキルでＫＯされるだろう所なので、素直に謝っておく。

けれど、拳の衝撃を予想していた俺の頭にぶつかったのは柔らかい手の感触だった。
「まぁ、いいです」
「へ？」
「許してあげます。素直に謝りましたし」
「あ、ありがとう」
拍子抜けしかけつつも、何故か頭のレーダーが危険を察知していた。
目の前の少女の笑顔は、何となーく厄介事の感じがすると。
なんとなく表現するなら、クエストをクリアしたけれど次は――と続いて次のクエストがある時の様な感じが。

その嫌な感じを無理矢理無視し、目に見えている問題を先に据える。
何せ、目の前には一番の問題が居るのだから。
「そ、それじゃ、最後の問題だな」
「最後の、って何？」
フゼイが頭上に？マークを浮かべながら聞いた。
「【魔王】か」
それについて説明しようと口を開く前に、サキモリが呟いた。
「は？　どういう意味？」
フゼイがサキモリに疑問の顔を向けるが、それを押さえて俺が答える。

「この世界は既に一度【クリア】された。だから、【魔王】が、倒すべき敵が、居ない」

一呼吸置き、説明を追加する。
「つまりだ。１７万のプレイヤーは【魔王】を倒した時に現れたウインドウに従って元の世界へと帰って行った。つまり、【あなたは、この世界を去りますか？】に【Ｙｅｓ】と答えたわけだ」
目の前の女性プレイヤーの目を直視しながら、事実を告げる。
「だから、今この【魔王】が居ない世界においては元の世界へ帰るための方法が、無い」
「え……。で、でも――」
やはり想像だにしてないだろう答えに狼狽えつつ反論しようとした少女の声に重ねる様にしてサキモリが言う。
「今、丁度２時間立った」
「え？　どういう事？」
手首につけているゴツい時計を見ながらのサキモリの一言に驚いたフゼイが疑問の声を上げる。
「俺達が、３０万人のプレイヤーがこの世界に拉致された時には、

その約1時間後に【魔王】が現れた」
「ああ。間違いないな。多少の時間差はあったがそれぐらいに現れた」
「え？　え？」
「つまりだ、フゼイ。もし仮にそこの彼女が新規プレイヤーとして魔王を倒す勇者として呼ばれたのなら、【魔王】にも復活してもらわなければならない。何せ、アレを倒す他に帰る方法が無いのだから。それだけは、俺達が4年間かけて証明してきた。どんな方法でも、あのウインドウでＹｅｓを選ぶ以外にこの世界から帰ることは出来なかった。死体になってもこの世界には残留したのだから、文字通り死んでも帰ることは出来ない」
なおも状況を呑み込めてないフゼイにサキモリが説明する。目の前の少女へと半分ほど目線を向けながら。
「そんな……事って……」
モミジ、という名の少女はそれっきり頭を長い前髪に隠してうなだれてしまった。

落ち込んでいるだろう少女に、一応の声をかける。
「……まぁ、少なくとも【ラピス】から外に出なければモンスターに襲われることは無い。無料宿屋に泊まりながら、大人しく何らかの救済措置を待つのが妥当だろうな。この世界に果たして救済してくれる神（ゲームマスター）が居るのかどうかは怪しいが。俺達も色々と原因を探ってみるし。きっとうまく行く方法が見つかるさ」
何なら、俺達が付き添って――と言いかけたところで、目の前の少女の唇が動いている事に気がついた。
「ねぇ……」
「ん？　なんだ？」
「この【プレイヤーカード】によれば、あなた【シグレ】のレベルは91。そうだよね？」
「あ、あぁ……」

いきなり何を言い出すのか。と思いつつ、答える。
「そして私のレベルは1。……低い、というか思いっきり初心者(ニュービー)のレベルだよね」
「そうだが……？」

「それじゃあ、1つお願いがあるの」
俯いていた頭を上げ、少女が真っ直ぐに俺の目を見た。
目の前の少女が何を考えているかわからなくて、頭ではぼんやりとその少女の色素の薄い茶色の目は綺麗だと思った。
「ハンマーの件の代わりに、」
目の前の少女、いや違う。この世界にやってきた1人のプレイヤー、モミジは予想外のことを口にした。

「私と、パーティーを組んで。そして、【魔王城】へと連れて行って欲しい」
「……」

咄嗟のことで、返事が出来なかった。
確かに、妥当な判断ではある。
【魔王】が居なくとも、あそこにたどり着けば何らかの可能性が残っているかもしれない。
だから、俺もこの後【魔王城】へ偵察しに行く予定だったし、恐らくサキモリもそう考えていただろう。
けれど、まさか自分を連れて行ってほしいというとは、思わなかった。
街の外にはモンスターがうじゃうじゃいる。しかも、ウィルシリーズはリアル系のRPG。モンスターは限りなく恐ろしい格好をしている。たとえ低レベルでもだ。
それは、言葉に聞いただけでもウィルシリーズをやったことがある人間なら大体想像できる。ある意味シリーズのお約束の様な物。

そして彼女の言動からして、彼女は恐らくウィルシリーズをやり込んでいると思われる。
だからこそ、俺は彼女に外に出てみるかとは聞かなかったのだ。彼女はモンスターたちの外見を想像できただろうから。
あんなモンスターと、生身で対峙するなんて想像するだけでも恐ろしいと感じるのが普通だ。

だから、もう一度目の前の女性プレイヤーモミジの目を見て、問う。
「もう一度言う。街の外にはモンスターが溢れんばかりにいる。それでも、戦う事を選ぶのか？」
「Ｙｅｓ」
ウィルシリーズのお決まりの、【選択肢】の答え方でモミジが答えた。
その茶色い目は、本気だと言っていた。
「……分かった。ま、モンスターの外見を見て気が変わったらいつでも言ってくれ」
「……」
流石に覚悟していても、その辺は怖いらしい。
無言で首を縦に振ったモミジに、右手を差し出した。
「それじゃあ、パーティー結成だ」
「はいっ！」
差し出された俺の右手を、確かに握ったモミジの右手を眺めながら、俺は【メニュー】からモミジを【パーティー】へと招待した。

０５――有り得無い筈の初心者（後書き）

一旦連続投稿は終わりですー。
また気紛れに適当に書いて適当に落とします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3642y/

エンディット・ファンタジア

2011年11月17日21時37分発行